

デカチンポ搜索隊

セクシー&スパイシー

目次

序章	檻の入り口で――	一
一章	セクシー&スパイシー――	二
二章	??	
三章	??	
四章	??	
五章	??	

序章 檻の入り口で

部屋には窓がなかった。扉を閉めて鍵をかければ、日の光の届かない鬱屈とした密室ができあがる。天井の淡い薄桃色のライトだけが、頼りなさげに壁を照らしていた。

「っし、それじゃあ初めて行きますかァ」

ぱん、と手を叩いた音は、湿った空気に阻まれ、重たい壁紙に飲み込まれ、反響することなく消えていく。裸足の足裏が薄いカーペットを踏み締める音も、細かな機械を弄る硬い音も、シーツのシワを整える音も、どれもが汁気に囚われて、情けなく壁や床に沈んでしまう。

全てが重たく、生暖かく、濡れていた。壁、天井、床……ベッドも、シーツも、ライトも鏡もアメニティの数々も。どれもこれもがどこか陰鬱で艶かしい湿気を帯びて

横たわる。日の光が届かない構造だからと言うのもあるだろう。換気扇が数世代前の骨董品なのも原因だろう。けれど、それよりも何よりも。

「……セイア、あたしたちの仕事、忘れてないだろうな」

「確認せずとも、分かっているよネル。こんな茶番で絆される程、身持ちは軽くないさ」

「あれ？ 二人ともコソコソ話はダメだって」

「これから楽しくやるんだからさ、仲良くオープンにやっていきましょうや」

空気そのもの。部屋が纏う雰囲気やオーラといった何かが、ふんだんに汁を滲み混ませている。ねっとり、ずっしりと、肌にまとわりつくようないやらしい空気。この部屋で繰り返されてきた数々の「情事」によって熟成された卑猥な空気が、部屋全体に滞留していた。雄と雌の絡みあった証が何層にも塗り重ねられ、取れない滲みとして部屋そのものを覆っている。

そして、新たな入室者にも、更なる塗り重ねを求めるように絡みついてくる。一度中に踏み込めば、空気に全身が絡め取られ、呼吸する度に血肉へと淫乱が潜り込んできく。

快適な入眠を促す場所としては及第点を大きく下回るが、「別の目的」を想定していたとするのなら、これ以上にはないベストスポットと言えるだろう。

「つるせえッ！ テメエらとは今夜限りでサヨナラなんだよッ！」

「そっかア残念……」

「そんならそれで、一生忘れられなくなる、思い出になる一晩にしようねえ」

「へ、屁理屈だね。私たちの思い出になりたいのなら、もう少し態度から推敲を重ねるべきだよ」

寝入るにはいささか巨大すぎるベッドの脇に、少女が二人佇んでいた。このどろりと重たい部屋には見合わない、小柄で幼い印象を受ける二人。しかし、この理性を蕩し本能を剥き出しにする部屋には最適な、卑猥な格好を惜しげもなく晒す二人。

一見、暇を持て余しているだけの様子を醸し出そうとしている。が、その実、周囲に過敏なまでに拒絶のオーラを放っていた。

部屋の中を眺めるふりをして、二人の周囲で忙しなく動き回る男たちを油断なく観察する。すぐ側にいる狐に対し、野ウサギが逃げるチャンスを見計らっているかのよう。

「つか、ネルちゃんもセイアちゃんも表情堅くね？ リラックスリラックスうー」

男の一人が背後から、少女たちの肩を抱く。二人の細い体躯と比較し、余りに太く屈強な腕。男が力を込めれば、そのまま腰からぽきりと折ってしまいそうな程、雄と雌の差が現れていた。

「仲良い感じ出すの、結構大事なんだよ？ 後から無理矢理やったとか言われたら回収騒ぎにもなるしさ」

「さ、さわんじゃねえ……ッ！　つか、どの口がほざいてやがるッ！」

「ネル、熱くなりすぎだよ。元々、全力で協力するなんて契約じゃないんだ。出演してあげるだけ十分と思って欲しいな」

耳元に囁きかけてくる男を、少女の一人は邪険に振り払い、もう一人は冷静ぶって口撃する。体格で遥かに優れる男たちを前にして、少女たちは一切怯まなかった。

いや、怯んでやるものと己を奮い立たせていた。

「そもそも、なんでもう撮ってたよ……まだ撮影じゃねえだろ？」

「仲良い感じが大事って言うてるでしょ？　撮影裏を記録しとくのも保険になるんだよ」

「撮影裏とかも結構再生回るしな」

男の一人が構えるスマホを睨む少女。録画しているとわかると、即座に手で顔を隠す。

「……悪いけど、私たちは」

「わーってるって。顔出しZのでしょ？　でも、Zの「設定」になるかもだしさあ」

少女たちが露わにする剥き出しの拒絶も、男はヘラヘラと受け流す。顔を覆う手の隙間から見える鋭い視線も、まるで意味を成していない。

男たちは分かっている。少女たちのソレは小動物の虚勢に過ぎないものだ。子猫が懸命に産毛を浮き立たせているかのような。小さな綿毛がふわっと膨らんだ綿毛になっただけのような。どれだけ意地を張ったって、相手との絶対的な隔りを覆すことはできないこと。

そして、その屈辱的な事実も、少女たち自身も理解していた。だから、二人は身を寄せ合って、互いが互いを支え合って、このヘドロまみれの空気に抗っていた。もじもじと落ち着かない様子で身を振り、動き回る男たちに油断なく目を配る。

「……」

喧嘩腰を崩さない少女が、冷静を装った少女の肌をつついた。二人の間で決めていたハンドサイン。

——あたしたちは誰だ？

「……」

サインを受けた少女は、戸惑うことなく指先を相棒の肌に押し当てた。

——私たちはS&Sだ。

お互い目を合わせることはない。だが、小さく頷き合う。

「おっし準備オッケェー！　ネルちゃんセイアちゃんこっち来てねェ」

不自然なくらいに明るい声をあげ、男が少女たちに手招きをする。まるで旧知の中であるかのように。撮影している動画が、本当に後々公開されることを確信しているかのように。

だが、

「な、名前呼ぶんじゃない！ Zのつつってんだろぅが！」

「その動画「も」、後でちゃんと消してもらぅからね」

少女たちのツンケンとした態度が和らぐことはない。渋々といった足取りで、ベツドに構える男たちの元へと歩を進める。一步一步、カーペットを踏み締めるごと、そこに染み込んだ粘つくモノが、二人の足に絡み付く。更に一步を踏み出すと、ソレはぬるぬると這い上がってくる。

ただ歩き、進んでいるだけなのに、深い沼の底に沈んでいくかのような錯覚を覚える。どろりと身体を自由を奪い、逃げることも、助けを求めることもできない深みへと、自らの足で踏み入っていく。

「はいはい。「後で」ちゃんと確認取りますよー」

「緊張しすぎだって。やってみりゃ結構楽しいんだからさあ」

明るい男たちの口調は、一周回って不気味に響く。場にそぐわない朗らかな声は、下手くそな仕掛け罠のようだ。

場所も、空気も、少女たちが知覚する全てが「この先は危険」と叫んでいる。それなのに男たちだけが、「楽しいよ」と嘯いて笑っている。見え見えの落とし穴の向こうに置かれたハリボテの財宝だ。

しかし。これが全て邪悪な心を作り出した幻であると分かっている。二人は歩みを止めることはできなかった。

——とつとと終わらせてやる。

少女はヘラヘラ笑っている男たちを睨み付け、唇を噛んだ。

——彼らの思うようになんか、なってやらないさ。

へばり付く雄の視線を振り払う方に顔を背け、少女は耳を絞った。

「っし、ンじゃあ早速、自己紹介から撮りましょっか！」

煩いくらいの声に、男たちがテンション高く「アーイ！」と答える。

付いていけないハイな空気に飲まれないよう、二人は今一度、互いの手を強く握り合った。

一章 セクシー&スパイシー

カメラの電源が入った。

ぼんやりと薄紫色の何かが映し出され、様子を見るように焦点が絞られる。ピントを調節した先に現れたのは、踏みならされたカーペット。一般的な照明の元では少々毒々しさを感じる色とデザインなのだろうが、薄暗い視界の中では、むしろ安心感を覚える濃い色合いになっていた。

「ン……ふ、ッ♥」

「は、ふ、ふ、ふう……♥」

小さく、細く、弱々しく。誰かの吐息が聞こえてくる。それはまるで目前に獣が迫った小動物が発するような音だった。緊張に全身を強張らせ、気を失わないためだけに最小限の呼吸を繰り返すような、弱者の音。

何かを調節するように、カメラが左右に揺れた。そして上へと持ち上がる。素人丸出しの動きだが、何故か不快感はない。安っぽいカーペットや粗末な照明と、ぎこちない視界の動きがマッチして、見るものに何かを期待させる。

「この先に何か驚くモノが映るんじゃないか」なんて、ホラー作品の冒頭にも似たワクワクとドキドキが募っていく。

カメラが最初に捉えたのは八本の足。ベッドサイドに腰掛けて、足をカメラに向かって下ろしている構図。何もそう言ったカタチの化け物が映り込んだのではない。

二本一対、四人の誰かの、むき出しの足。

だが、だからといって、「なんだただの足か」なんてガツカリはしない。四人の足を見るだけで、やはり期待感が込み上げる。人が持つ好奇心がくすぐられる。

足は二人ずつ、大きく異なるカタチをしていた。

サイズ、性別、色、シルエット、その足の持ち主が置かれている状況、またそれによって生み出される感情。何もかもが二分されていた。

白と黒、陰陽、真逆で、対照的で、極端だ。二つのギャップに含まれる事情を妄想するだけで、どれだけでも時間がすぎていきそうだ。

大きな二人の足が、小さな二人の足を左右から挟み込んでいた。

大柄で、屈強で、並の男性を遥かに上回る筋肉を宿した男たちの日焼けした足。一本一本が丸太のように太く角張って見える。画面の占有率が高いのは、足を開いて座っているからだけではないだろう。彼らが持つ圧倒的な自信が、太い足だけからでも

迸っている。どつしりとカーペットを足裏で踏み締めている様がまた、千年を生きた樹木のように逞しい。

一方で、そんな大樹のような足に挟まれた二人の小さな足は、白く繊細で、絹織物のような儚さを纏っていた。

どんよりとした、黒と闇で彩られたカメラの視界にあって、その少女たちの足だけが、うつすらと輝くような潔白を保っていた。薄汚れた世界でただ一つ、神から祝福を受けたかのような、眩しさすら覚える御御足。

男たちのそれのように筋肉が盛り上がることも、かといって病的に骨ばることもない。ふつくと柔らかな脂肪でコーティングされ、傷ひとつ、シミひとつの穢れすらも存在を許されない美術品。清楚に両足を揃えて座っているカタチがまたそれらしい。

「ンッ♡」

「ッ♡ こ、の……！」

だが。だが、少女たちが神に祝福など受けていないことは一目でわかる。祝福があればこんな景色は生まれないと、一瞬で思い直すことができる。その事実こそが見る者の好奇心を膨らませる。

左右でどっかりと、偉そうに足を広げて座る男たち。その間に生まれた小さな隙間に、押し除けられるように収まる少女たち。二者の力関係が圧倒的かつ絶対のものであると、それだけで察せるだろう。

察すると言うのなら、足から漂う雰囲気からして、男たちとはまるで違う。

落ち着きのない少女たちの足からは、心の底からの居心地悪さが染み出していた。押し付けられる男たちの太ももから逃げるように、互いに寄り添うように、もぞりもぞりとベッドサイドの上でもがいている。

高さが足りず、カーペットに爪先までしか届いていない所もまた、少女たちの不安げな感情を現すようだった。

根を張ってその場に定着することもできず、かと言って不自由のない空へと飛び立つこともできず、せめてその場に留まろうと足先を伸ばしてカーペットに触れ、ささやかな安心感にしがみつく。けれど、傍若無人に拡大する巨木には、成すすべなく蹂躪される。

少女たちの努力も気力も、強大な男たちの前では無いも同然と言わんばかりだ。

足を堪能し終えたカメラは、また上に向かってアングルを動かす。ピントが絞られ、男たちは画角の外へと追いやられる。逆に言えば、少女たちがカメラの視線という逃げられない檻に閉じ込められる。

「……」

「ッ！」

顔が見える直前、少女たちの細く今にも折れそうな首元が見えたところで、カメラはまた止まった。少女たちは何かに怯えたように、一瞬両手を持ち上げ、また膝におろした。

カメラは焦らすように揺れ、少女たちの肢体をねっとりねぶるように記録に収めていく。足がそうであつたように、少女たちの姿はまるで巨匠が生み出した美術品のように、白く美しく穢れがなかった。同時に、足からだけではわからない、異なる美の方向性が見えてくる。

一人は小さい肉体に濃縮された気高さを詰め込んでいた。鍛えた筋肉は、不必要に固くなることも不恰好に肥大化することもないが、柔軟性と密度に関しては極まっている。おそらく並のアスリートを置いてけぼりにする力と速さ、美しさを披露できるだろう。

こんな場所で大人しく座っているには相応しくない、熱いエネルギーが感じられた。肩口から溢れる、三つ編みに纏めたオレンジの髪にも、少女のスポーティーで爽やかな魅力が香っていた。

もう一人は体格こそ似通っているが、積み上げられた叡智が感じられた。鍛錬からは遠のいていたであろう体軀には、より一層の柔らかさが広がっている。だが決してだらしないと感じることはない。座り様、並べた足の整い方、全てに知性と理性を突き詰めた合理があった。

正に、完成された人形のようなカタチだ。背中を鮮やかに魅せる長い髪は、儚げな乳白色から次第に活発な黄色へとグラデーションが生まれている。ふわりと広がる毛先は、天使の羽のようでもあった。

「二人とも？ まだ緊張してるっしょ」

「せっかく可愛いのに、全身カチカチじゃんかあ」

だが、悲しいかな。どれだけのエネルギーを持っていようと、どれだけの叡智を積み重ねていようと。少女たちがカメラの画角という鳥籠から飛び立つことは叶わない。檻のように挟み込んでくる男たちに、抗うという手段は残されていない。

それを象徴するかのようには、水着が少女たちを縛り付けていた。

水着だ。まるで紐のように細く、頼りなく、凹凸の少ない少女たちの身体に「引っかかっている」だけのように見える、マイクロビキニ。

胸や股間をなんとなく守っているように見せているだけの、衣類としても水着としても意味を果たさない紐クズ。よく見れば、それはうつすらと布地が透け、向こうの美しい色合いを微かに滲ませていた。最低限の布地すら、局部を守るところか期待させるように色を透かす有り様。もはや裸になった方が、よっぽど潔いと感じてしまいうるようになる。

繊細でありながらもその内に強さを秘めている少女たちとは、まるで違う。ただ、ただ細く弱々しいだけ。少女が好んで着るようなモノではない。泳ぐなんてもっての外。増して、複数の男に囲まれて、息苦しいベッドサイドで披露する姿などではない。

それ以外に選択肢が無いような場合でもなければ。

「リラックス、りらあゝつくすう」

「ナントカ接触効果って知ってる？　ハグとかマジで良いんだってよ」

左右から手が伸びてくる。

聖女を穢す悪魔の舌の如く、なんの躊躇も遠慮もなく、ごわついた手のひらを小さな肩に置き、繊細さのカケラも無い指で柔らかな肌を凹ませた。少女の喉が「くっ」と震えた。何かを発しようとして、そして飲み込むような仕草。身体を這いずる邪悪な手を、振り払うことなく受け入れる。受け入れさせられている。

あまりに大きく、あまりに小さい。

男から放たれる強者の余裕は、ただでさえ大きな手のひらを数段巨大に見せている。そして、少女の身体に押さえ込まれた束縛感、男たちの接触により、また一段と縮こまった。左右の男も、身に纏う心細げなマイクロビキニも、身体をロックオンして離さないカメラも、全てが少女たちを捕える楔であり枷であり檻だった。

「お、おい、いつまで、触ってんだよ……は、早く、進めろって」

「単純接触効果は、双方の信頼あつてのこと、だよ。私はそこまで、君に信頼を置いては、いない」

長いボディタッチに耐えかねて、少女たちはか細い声を上げた。マイクロビキニを気にすることなく触ってくる手へと、細腕を振り上げる。が、

「あ、ホラ顔出しいくよ」

カメラマンの一言で、小さな身体が二つ、面白いほどに跳ね上がった。漫画なら「びくん」なんて擬音が入るような驚きよう。男たちを押し除けるために持ち上げた手を、カメラの動きに合わせて、素早く顔の前に突き出した。

「ッ！ 合図しろって言ったろ！」

「本当、ゆ、油断も隙もない……」

カメラがやっと本来の角度に上がった。そこには、顔を手で隠したマイクロビキニ姿の少女が二人、大柄な男たちに囲まれて座っていた。

悔しそうな口元も、羞恥に燃え上がりそうな赤い頬も、髪、耳、後ろに浮かんだヘイローまでが顕になっている。辛うじて、本当にギリギリ、決定的な「誰か」だと断定するのは難しい程度に目元を隠しているだけ。他はまるで無防備。守ってくれてるのは頼りない紐ビキニだけ。

もし今、顔にかざした手をおろしてしまつたら。ただ顔が撮影記録に残るというだけでは済まされない。密室で、大勢の男に囲まれて、あられも無い格好で、映像の撮影に参加している「誰か」として、今後を生きていく上で重たすぎる足枷ができてしまう。

少なくとも少女たちは、それを良しとはしない状況にあった。良しとはしないが、それでも撮影に臨まなければいけない、そんな複雑な状況にあった。

イラスト（まだ秘密）

「ビックリした？ 肩の力抜けて、意外とアリっしょ」

「っば、サプライズって映えになんのよ、リアクション良いしさ」

少女の左右と、そして背後に男が一人ずつ。正面にもまた、カメラを構えている一人。もしかしたら画面外にも待機しているかもしれない。

分厚い筋肉の壁は、誰かから二人を守るためにあるのでは無い。むしろ逆。少女たちという貴重で極上の「餌」を消して逃すことのないように敷かれた包囲網。逃さず、許さず、哀れな少女を邪悪な欲望で包み込む。

「まだ張ってるトコあるね？　ちゃんと揉みほぐしとかないとね」

「ンッ♥　ふ、不要、だ……よ……ッ♥　さ、撮影とは、関係、ないだろう……」

叡智溢れる少女の太ももに、再び男の手が沈み込む。細身の割にはむっちりとした肉の質感を確かめるように、手は何度も尻から膝までを往復した。

少女はびくん、とその身を揺らし、甘い吐息を溢した。不満を現わすようにヘイロ―が揺れた。そのまま男の手を掴むが、

「関係おおアリだって。棒読みとかマジ、ネタにしかならねえから。俺ら、ガチのエロ

目指してっから……演者もガチってくんねえと困るワケ」

「フ、ンッ♥　だ、だッとしても……ッく、わ、わざわざ、撮影中にやらなくても……
オ、ふ、ふうううッ♥」

倒れてくる大木を相手に小枝で争おうとするようなものだ。撫で回してくる手は止まらない。両手を使って抵抗すれば、まだマシなのだろうが。

「ふ、ちょ、つと……揺らさないで、欲しいな……ッ♥」

片手は顔を隠す大仕事の真っ最中。乱暴な男の撫で回しに揺れる身体に合わせ、カメラに顔が入らないよう意識を注がなくてはいけない。余った手と意識だけで、男のボディタッチを掻い潜るのは不可能だ。少女は時折身体をビクつかせ、形ばかりの抵抗を見せつつ、されるがままに撫で回されるばかりだ。

「ど？　どっか、こってるトコあるう？　俺はリクエスト聞いてあげるよ？」
「し、知るか……だ、黙ってろ……おッ♥　リク、聞くってんなら、黙って、座ってやがッ♥　ふッくア……♥」

力強く肩を張る少女の胸を、男の指が馴れ馴れしく握り込む。薄く、ささやかと言
って良いレベルの、貧乳おっぱい。だが、男はそこに柔らかさを見出し、太い指を沈
ませる。

「はいダメーそちらはサービス対象外でえす。なら勝手におっぱいイっちゃうね。硬
いおっぱいとかマジムリだから」

「は、ちょッ、ンぐッ♥ ふッ♥ ン…や、めッ、おい、ベタベタ気持ちわりい
ンだよ…ッ♥

刺々しい言葉で争う少女。しかし、男の余裕を崩すにはあまりにへなちょこだ。む
しろ、小動物の威嚇のように、加虐性を育てる始末。片手で目元を隠しているのだけ
ら当然だ。男を弾こうと動かす手は虚しく空をきる。

「隙アリい！」

「ッ！ こ、のッ♥ おい、引っ張んなッ♥ おい！」

男がビキニ紐を引っ張るが、それを防ぐことも叶わない。ぷるん、と確かな膨らみが、ビキニ紐に引っ張られて揺れる。貧弱な防御がズレて、少女のツンと尖った突起がカメラのレンズに晒された。薄布越しに見えていた薄桃色の正体が、くつきりとしたピンクとして現れる

「うはッ！ 乳首デカくね？ これ隠すのギリだったっしょ！」

「くくくッせえッ♥ い、良いから、放せって言ってんだろおがッ♥」

ビキニをズラしてくる男にしがみつく少女の細腕。だがやはり、その努力が身を結ぶことはなく、曝け出された乳首が虚しくぷるぷると震えるだけだった。

されるがまま。必死にもかく野ネズミを、猫が欠伸混じりに転がして遊ぶかの如く。獣と獣の戦いですらない。獣が餌を突つくような、絶対的な上と下を表現したかのような絵面だった。

「でもさあ、やっぱ顔だよね顔。顔隠してんのはなんか、ハマんねえわァ」

顔。その一言に、小さな身体は素直すぎる反応を見せた。ただでさえ小さく収まっていた身をキュ、と一層縮こまらせる。ヘイローを揺らがせ、唇を引き結び、顔を隠す指先にまで力が籠る。

「二人ともガチ美人だからさ」

「つぱ顔撮りたいよね……どお？ モチ、色々補助増やすしさ」

言いながら、背後の男が少女二人の腕を掴む。まるで小枝でも握るように、大きな手のひらは軽々と腕を握り込んでしまう。顔を隠すその上を退かせようと引っ張った。

「い、今更そんなッ！ さ、撮影前にZのを出しているし、撤回しない……ッ！」
「つか始まってから交渉すんじゃないねえ！ あたしたちは顔出ししねえ！ おい、ッ！
引っ張んな！」

「ダイジョブダイジョブ。この辺はカットできっから」

「心配してんのはそこじゃねえ！」

座りの悪いベッドの上、左右からはスケベ丸出しの手、後ろからは顔を晒させようとちよっかいをかけてくる手。対して、少女の片手は顔を覆うために動かせず、顔を隠しているが故、セクハラを上手にあしらえない。

「ええ〜？ マジ、保証すっから。ゼッテゝその方が人気出るって！」

「こんなトコで人気なんか欲しくねえって言ってんだよッ」

「開放的になった方が色々楽しくなると思うんだけどなあ」

「楽しむつもりなんか、毛頭ないんだよ……私たちは、最初、からッ」

揺れる身体。ぶれる手。顔だけでも、と腕に力を込め、空いた手をバタバタと無闇に動かす。まるで不貞腐れて暴れる子供そのもの。対する男たちの対応は、それをあやす余裕たっぷりの大人のそれだ。

正しい関係は、雄と雌ですらないのだが。

「ま、触りまくれっからどっちでも良いんだけどさ」

「ちょ……ッ、お♥ ふ、どこ触って……ン♥ ふッ♥ 待って、ソコはッ♥」

叡智の少女の太ももへ、ゴツゴツとした指が滑り込む。汗を拭うように滑り、そしてクチュ♥ と三角の隙間に潜り込んだ。

左右の太ももと、ないも同然のビキニパンツに囲まれた、小さな小さな肉空間。少女は咄嗟に足を引き締め腕にしがみ付き、侵入者を排除しようとする。が、

「ソコとかココとか禁止ね。先に決めたっしょ？」

少女の行動は逆に、男の手を自らの秘部に押し付けているようなものだ。じつとりと水気を含んだ股間へと、邪悪な指先を留め置くことにしか繋がらない。

クチュ♡ にゆくチュ♡

指がぷにぷにの肉を捏ねる。詰まった熱を吐き出させるように、溜め込んだ汁をかき出すよう、最小限の動きで、最大限音を響かせて手マンする。

「ンゝおツ♡ あッだめ♡ そ……ソコだッ」

「禁止って聞こえなかった？」

クチュ♡ つ、ちゅぷツ♡ ズツぢゅ♡

少女の制止など意に介さず、カメラのマイクにも届くような、ねっちりトロつく雌の音色を奏で続ける。

「やツ♡ あオゝうツ♡ ふ、ふ、お……おまんこ、おまッこ、やめてくツ♡ ふゝうツ♡ まだツ♡ 心のじゅゝンッ♡」

少女はたまらず白旗をあげた。小さな口が「お」と震えたり「ん」と引き攣ったり、
ころころと面白いように変化する。

さっきまでは怯えながらも気高く己を保っていたのに。頑なに顔出しに抗い、セク
ハラに難色を示していたのに。おまんこをイジくられ出したら一変。

「言えんじゃんまんこ。次からはぷにまんって言えよ？」

「は……そッ♥ そんなの、決まりにはな……」

ずつチュ♥

「ふキュ、う、う、うッ♥」

「言えく？」

チュぷ♥ にチュぷッ♥ ぬちッ♥ ぬちッ♥ ぬぢィ〜♥

「おッッッ ♡ ふ ♡ ぷっ、ぷにまんッ ♡ ぷにまんこねるのやへ っえ っえ っえッ
♡ ほ っおッ ♡ ふ ♡ ンッ ♡ くふッ ♡ ぷにまん痺れッ ♡ う っう っうッ
♡ ♡ ♡」

男の手マンと「命令」にあっさり陥落。薄い胸板をプルプルと突き出し、蕩けた間
抜けな声をあげて従ってしまう。

「じゃ、こっちはキツまんかな？ マジでセッまいんだよなァ」
「るッせえ…：勝手に決めるんじゃないや…： お ♡ ふッきお っおッ ♡」

叡智の少女の遅滞を横目に、強気な少女にも男の邪な手が迫っていた。ビキニの守
りを取り払われた胸を揉まれ、少女は呻くように反応する。

「うはッ！ なんか前揉んだ時よりデカくなってね？ マゾメスホルモン出しすぎ
だろ」

「ッ♥ は、し、知るかよッ♥ うお♥ ふッ♥ ン…ッ♥ 放せッ♥ 手つきが気持ちッわりひッ♥ だよ♥」

ツンケンな態度も、舌足らずに喘ぎながらでは逆に可愛らしさすら感じてしまう。男もヘラヘラ笑ったまま、乳揉みを止めることはない。

くり♥

「くヒゝい…ふッ♥ くッ♥ ンふッ♥」

「我慢は毒だよお？ くく、コッチは「すごい気持ちイイのお」って言うてるんだからさ」

強気な性格を現すように、ツンと尖った乳の先。ぷっくり赤く膨らんだ、少女の大事なさくらんぼ。

男の指が触れた瞬間、少女は喉を震わせ、溜め込んだトロ声を溢してしまう。

「しッ♥ しらねッ♥ 言ってねえ……勝手に、適当なコトほざいてンリゃ……」

くりくりくりイツ♥

「ほゝおゝおゝおゝウッ♥♥♥」

「ハイ、強がり乙ウゝ」

ぷっくり膨れた乳頭は、男の指に転がされ、くりんくりんと転げ回る。まるでゲムコントローラーのスティックのように、軽快な動作で上下左右に押され、引かれ、潰される。

くりッ♥ぬり♥ぬりゆり♥

「やゝえゝおッ♥おゝおゝおゝほゝうゝおゝおゝおゝッ♥しッ、しつけえッ♥ネチネチネチネチッ♥こねてくるんじやッ♥」

「ン？ カリカリの方が好きだったっけ？」

「ちげッ♥ そうじゃ…：ねえッ」

文句を言えば軽快に交わされ、

かりゅッ♥ カツカツッ♥ ぐゝりィッ♥

「ゝあゝおゝおゝおおおーーッ♥♥♥ ぞれッ♥ ぞれだめッ♥ くゝおゝゝ」
乳首キきずぎゝるゝウッ♥」

即座にキツいカウンターを喰らってしまふ。

抵抗しない訳にはいかず。かと言って抵抗すれば、その分だけ痛い目を見るのは少女の方。八方塞がりどころではない。八方から邪悪な快樂が迫り、今まさに少女を押し潰そうとしているのだ。



「はいはい、特典映像ばっか撮っても終わンねえから。良い加減初めてこーな」

後ろの男が口を挟むまで約数分。二人はたっぷり、その肢体を弄ばれ続けた。

「はッ♥ふ♥ふッ♥くふッ♥」

「ンッ♥お♥くしッ♥くぞ♥ぐしッ♥おッ♥おッ♥」

身体は汗だく。ビキニは更にズレ、濡れて透け、もはや着ていると言うより肌に張り付いているだけの布きれでしかない。

びん♥と更に膨れた大きな乳首。ぐちよむわ♥と雌フェロモンを立ち上らせるおまんこ。どれもこれも、丸出しになっているも同然の有様だった。

二人が守りきったのは、顔にかざした自分の手だけ。そのただ一つを維持するために支払った代償は、赤く火照った身体に深く刻みつけられていた。

「ンじゃ、とりま自己紹介からね」

「じゃあ……まずこっちから、教えてくださあゝい」

腹をピク付かせて震えている叡智の少女にカメラが向く。全身を大粒の汗で濡らした少女は、陶器のように白い肌に赤々と興奮を彩らせ、蕩けそうな唇を開ける。

「は、初めまして……ッ♥ セクシー・イアです♥ 身長、149センチメートル。スリーサイズは……ッ♥ B73の、W57のッ、H80です♥ さ、最近、お尻が大きくなっ♥ 半年前より、時よりハセンチ大きくなってましたッ♥ 多分、今測ったらまた大きくなってると思います……ッ♥」

叡智の少女、イアは辿々しく、時折羞恥に声を詰まらせながら、言いきった。ヒップサイズを暴露する間、男がしつこく、ビキニ紐が食い込む尻を揉み回す。

カメラは無言で横にスライド。延々と乳首を撫でられてる強気な少女に狙いを変えた。覚悟を決めたように唇を噛み締めていた少女もまた、命じられる前に口を開いた。

「す、スパイシー・ネネです……よ、よろしく願いますッ♥ 身長146センチ、スリーサイズは72の51の74ですッ♥ ち、チャームポイントはッ♥ ン、ウ♥ 貧乳デカ乳首ですッ♥ ふ♥ 元はバスト、9センチだったんですけど、毎日揉まれて、大きくしてもらいましたッ♥ 乳首だけで1センチありますッ♥」

強気な少女ことネネも、多少ぶっきらぼうでありながらも自己紹介を終える。まるで横の男に操作されるように、時折乳首をこねられながら、屈辱的な言葉を並べあげた。

声が落ちつかず、揺れ動く。何かを拒絶するように、手を握り締める。けれど、台詞を止めない。止めることが許されない。

「二人合わせて、セクシー&スパイシー、です……っ」

「覆面△女優として、電撃デビュー、することになりましたッ！」

「はい、セクシー・イアちゃんとスパイシー・ネネちゃんです。よろしくう！」

背後の男が満足そうに手を叩いた。左右の男も、カメラマンも、口々に「よろしく」とにこやかに告げる。だがやはり、肝心の二人、ネネとイアは、いつまでも固く心を閉ざしているようだった。

「さ、そんなセクシー&スパイシーのお二人、今回初めての撮影になるの、かな？」

「も、勿論だとも」

「こんなトコ、何度も来てたまるかよッ！」

名乗ったからとてすぐに打ち解けるなんてこともなく。ネネもイアも、男への刺々しい態度は揺るがない。

しかし、男たちもまた一貫していた。一貫して、軽率で軽薄で、透かせそうな程に言動が薄っぺらかった。性欲ただ一つ。それが満たせるのなら、相手の態度も気持ちも関係ないとばかり。

「いやゝマジ嬉しい！　可愛い子、これまで何百人もスカウトしたし何十本も撮ったけど、今回の二人はマジのガチの激カワ美少女なんすよ！」

恐らくは、お世辞の交じらない正面からの褒め言葉だろう。軽薄が故にお世辞も氣遣いもない。

だが、少女たちがそれに気をよくした風はない。むしろ一層唇を引き締め、身を縮こめてしまう。

「けどねゝ覆面なんスよ」

「確定でみんな惚れる可愛さなんだけどねえ」

「出演は〇〇なんだけど、顔出しZQの一回こっきりのデビューになっちゃいました……」

「ざ、残念みてえに言ってんじゃねえ！」

心底落胆、とでも言うように肩を落として見せる男たち。

ネネがその仕草に食らいつく。言葉こそ発さないものの、イアも同じ意見のようだ。

「まッ！ 最後にはどうなるかわかんねーからな」

辛気臭い空気を切り裂くように、男が明るく手を叩く。そして、ネネとイアに「ここからはどうぞ」と手を差し出した。

「こ、今回はお試し出演のあたしたち、ネネとイアだけどッ！」

「今後……ほ、本契約して、専属△△女優になっても良いかもって思ってます……」

ぎこちない言葉の羅列。誰がどう見ても、本気で思っているなんて感じない、不満たっぷりな言いぐさ。隠しきれない戸惑いを逃がそうと、足をもぞりと動かした。

「な、なので今回は……スタッフ対セクシー&スパイシーのバトル企画ッ♥」

「か、勝ったら賞金ゲット、負けたら……顔出し、個人情報全オープンッ♥ せ、専属契約で、△△女優本格デビュー確定ッ」

緊張でカラカラの喉に、何度も唾を流し込む。小さくぷるんな唇を、赤い舌が何度も行き交う。

「雄と雌のプラド全ベツトで……アクメバトルッ♥」

言いきった瞬間、男たちが「いええーい！」と爆竹のように弾けた喝采をあげる。

肝心の、企画を読み上げたセクシー&スパイシーだけが、そのハイテンションに乗り遅れたまま、互いを支え合うように太ももを擦り合わせていた。

——あたしたちは誰だ？

——私たちはs&sだ。

そんな言葉を、ハンドサインで送り合った二人の少女。その正体は、得体の知れないAV撮影にホイホイ乗って来た、頭と股の緩い女……ではない。

（畜生ッ！ チンタラ進行しやがって……とつとと済ませやがれッ！）

（まったく、いつまで無関係な撮影を続けるんだ？ こんな連中に私たちは……っ）

ネネとイア。そんな名前の少女は実在しない。マイクロビキニ姿で男たちの間に腰掛けるその姿は、任務に従事する二人の仮初の姿。

ネネ……美甘ネルと、イア……百合園セイア。キヴォトスが誇る三大学園であるミレニアムとトリニティの重鎮たち。小さな手に隠された向こう側には、そんな驚愕の顔があった。

重鎮とは言うものの、二人に表立っての共通点はほとんどない。公的な文書などにも、二人の名が揃っていることなど皆無だろう。

片や百合園セイア。トリニティ総合学園にたった三人しか所属できない最高意思決定機関、ティーパーティーの一員。生徒と言う立場でありながら、派閥や言論ひしめくトリニティで権威を輝かせる叡智の少女。

卓越した知力と、それを魔法のように操って見せる論理思考を有するのは見た目のイメージ通り。そこに意外にも高い行動力が加わることで、常人には想定できないアクションを起こす「静かなる飛び道具」。

片や美甘ネル。メイド部なる部活の長を務める小柄な少女。そして、ミレニアムが誇る最強のエージェントチーム C&C (Cleaning&Clearing) の最強リーダーだ。

セイアとの違いは、名前が知れているのが裏社会側であること。ミレニウムやそれに関わる団体相手に悪さを企めば、遅かれ早かれ彼女の襲撃を受けることになる。悪党にとっては最も警戒すべき相手であり、彼女との邂逅は即、作戦の失敗へと繋がることだろう。

そんな二人の繋がりには、ミレニウムEXPOにまで遡る。秘密裏に行われた作戦の中で、少女たちは邂逅、そして意気投合。出会って間もなく、気の置けない仲となった。

二人のような秘密中の秘密の繋がりには、キヴォトスにおいては実は珍しい。何であれ即共有、拡散されるSNS社会にあって、そのネットにかからないチームアップはほぼなかったからだ。

故に、頼られる。ティーパーティーのような権力が及ばない場所に忍び込み、CCCからすら隠れきる真の悪党たちを、日の元へと引きずり出す「力」として。

（忘れんなよセイア……あたしたちはスパイだ。どこまで行っただけは揺らがねえ）

（心配無用だよネル。S&Sの使命と役割を果たす。そのためなら、多少の恥辱は飲み込むさ）

セクシーS（セイア）とスパイシーZ（ネル）。ミレニウム・トリニティ・シャーレの三組織が手を組んだスパイチーム、セクシー&スパイシー。二人とシャーレの先生しか知らない特別なチームだ。

隠した視線を交差させる少女たち。互いの目に、まだ周囲の男に抗う意志が残っていることを確かめあう。

この一見S&Sとは無関係そうなAV撮影現場。ある意味で想定内の状況であり、ある意味で絶対的ピンチの際にあった。

ネルとセイアが今回、SSSとして調査と壊滅を依頼されたのが、この違法△△撮影チームだった。

キヴォトスに一部存在する不良少女。その中でも特に危ういポジションにいる、パ活女子。色々な意味で不安定な彼女たちに「金になる仕事」として△△撮影を斡旋する。

大抵の場合はパ活の延長でホイホイ付いていくらしい。そうでなくても、前金としてパ活の比ではない金を実際に手渡してやることで、断られることはほぼなかったようだ。

つまりは、一度声をかけた少女はほぼ確実に彼らの毒牙に欠けられたということになる。

いざ撮影に入れば一変。半ば強制的な快樂責めで無垢な身体は一瞬で雌へと変えられる。判断能力を狂わされ、あれよあれよという間に個人情報抜き取りられ、弱みを握られ、我に帰った頃には袋小路に追い詰められている。

後は言いなりになって専属のハード<女優になるか、考えなしに抵抗してより「逃げ場のない」状況に追い詰められるかの二択しかない。

セクシー&スパイシーの仕事は、そんな撮影チームに潜り込むこと。

パパ活女子に扮して勧誘を受け、中核メンバーに接近。後はその圧倒的な制圧力で一網打尽。危険ではあるが実にシンプルな作戦のはずだった。

（本当は、こんなことになるより前に制圧が済む手筈だったんだけどね。まったく、自分のコトだと言うのに、思いの外理解できていなかったようだ）

（あたしだけじゃなくて、セイアまで「コッチ」に巻き込まれちゃうなんてな……情けねえッ！ コールサインダブルオーが聞いて呆れるぜ）

二人は失敗した。

情報が漏れていたとか、うつかり正体がバレてしまったとか、そんな間抜けな理由じゃない。

もっと間抜けでしようもない理由。

（百合園セイア……私という個体は本当に、どうして……ッ♡）

（これ以上はポカする訳にはいかねえぞ美甘ネルッ！ も、もう、絶対にッ♡）

ネルとセイアは、スパイチームセクシー&スパイシーの二人は、

（こんなにっ♡ チンポに弱いカラダだなんだい……♡）

（絶対にチンポに負ける訳にはいかねえんだよッ♡）

チンポに負けた。

パパ活に扮して接触し、そのまま男たちの雌ハメテクに、ストレートに堕とされた。

「シーもちっと硬さを抑えたいよな……みんなもっと寄って貰える？」

「ほら、二人ともピースピース！」

「とりまピースと笑顔だけあればオッケーだから」

映りが気に入らなかったのか、男たちはカメラを動かしたり明かりを強めたりと動き回る。そして、ぐい、と。

二人をその腕で抱き寄せた。

「「あッ♡♡♡」」

瞬間、艶っぽい声が二つあがる。

左右の男が、少女たちの腰周りほどはあろうかという丸太腕で、小さな肩を己の小脇に押し付ける。どれだけ鍛えても少女の域を出ない肌が、太い骨と分厚い筋肉の塊に包まれる。

「ふッ♥ン♥ふううッ♥」

「…ふ♥ふしゝウッ♥くウ…ッ！」

（で…っか♥か、カラダ熱っ♥それにか、硬いつ♥）

（ちくしょオッ♥こんな野郎に…下衆の強さにときめてんじゃねえッ♥）

うつかり顔を隠す手を下ろし、その逞し腕に、その頼もしい胸板に、抱きついてしまいたくなる衝動に襲われる。ムワ♥と広がる雄の臭いを吸い込んで、脳がだらしなくメロつきだす。

男たちは、ネルとセイアの正体になど気付いてはいない。きっと、自分たちを陥れる危険因子だと疑ってすらいないだろう。

何故そう断言できるかと言えば、

「ほら、イアちゃんもつくつついて」

「ン♥ わ、わかった、からっ♥ そんな、強くッ♥ っおッ♥ 引っ張らないで…
わ、私、軽いからッ♥」

「ネネちゃんもつと顔あげて、ほっぺくつつけちやおうね」

「ちッ♥ 近えんだよ…ッ♥ ふッ♥ っうお♥ 雄臭くつさ♥ ふ♥ ふ♥ あ、
あんまッ♥ ベタベタすんじゃないね、え…!!」

演技とは思えない程、少女たちの有り様が、チンポにメロメロな雌ネコだったから。
雄を間近に感じるだけで隠された目がトロつと緩み、拒絶に引き締められた口から火
照った吐息が溢れ出る。

誰がどう見てもチョロメスのそれ。まさかこんなにチンポ負け晒した少女たちが、
自分たちに歯向かう気満々のスパイだなんて思うまい。

何故ここまで完璧に騙せているかと言えば、

(く、おくくッ♡ 腕、腕太いッ♡ わ、私を軽々、オモチャみたいに動かしてッ♡
こ、こんな腕に抱き寄せられたら♡ 動けない♡ おかしい♡ 力が、全然っ♡
出てこないッ♡ 熱くなるばかりで、カラダ動かないッ♡♡♡)
(くそ♡ くそくそくそくッッッそおおッ♡ 勝手に腰くねるッ♡ メロついたザ
コメス仕草ッ♡ 勝手に出ちまう♡ コイツら雄過ぎて♡ あたしなんかただの雌
って本能でわからせられちまうううッ♡♡♡)

これが演技ではなく、少女たちの有り様は、腹の底から出るチンポにメロメロな雌
ネコだったから。純粋に雌として、雄にどうしようもなくチンポ負けしきっていたか
ら。

パパ活女子に扮してラブホテルに入った少女たち。予定ではそのままターゲットを
捕縛し、他の仲間の居場所を吐かせる「交渉」を始める手筈だった。

自分たちがあっさりチンポに屈服し、他のパパ活女子と同じく苛烈なハメ撮り映像を撮られ、△△出演を了承するまでハメ潰されることになるなど、想定していなかった。

だが、結果としてネルもセイヤもこの通り。

抱き寄せられるだけで絆されかけるチョロメスへと仕上がっている。ハメ撮り中に味合わされたアレコレや、その後一週間たつぷり舐けられたチン媚びマゾ女としての本能在、抱き寄せてくる男の腕に歓喜の声をあげるのだ。

最後の抵抗として、顔だし△△の条件は取り付けた。だが、

ずく♥

「ふッく……♥」

(し……子宮ッ♥ 疼く、う、う、うッ♥ い、けないッ♥ もう、身体が負ける準備を始めているッ♥ お、おまんこ屈服してッ♥ 気絶するまでハメ潰してもらえ
のッ♥ 楽しみになっ
てしまっているッ♥♥♥)

とく♥ とくッ♥ ぢゅくく……♥

「ふーッ♥ ふーッ♥ ふーッ♥」

(あっちィッ♥ 全身ッ♥ 雌丸出しで発情してやがるッ♥ 干からびるまで雌汁ぶちまけてごめんなさいアクメするの確信してゝるッ♥ 畜生ッ♥ 絶対ダメなのにッ♥ チン媚び命乞いしたくてたまんねええッ♥♥♥)

雄と肌を擦り合わせるだけで、少女たちの小さな身体は太陽よりも熱くなる。

チンポを教え込まされた穴の底から、雄と触れ合いまくった肌から、雄の情報を絶え間なく注がれ続けた脳の深みから、理性を溶かす本能の熱がこんこんと沸き上がってくる。

（耐えるんだ百合園セイア……ネルと、先生のためにもッ♥）

（お前がしっかりするんだよ美甘ネルッ！ セイアと先生のためにもッ♥）

お互いと、二人の帰りを待っているであろう先生のため。少女たちは今にも蕩けて男たちにしなだれかかりそうな身体の芯を持ち直す。

そんな、自らの使命を賭けた決死の踏ん張りも、

「もうちょっと角度変えよっか」

「オツケーっす」

「「んんんっ♥」」

男の腕に軽々と突き崩されてしまうのだが。

デカチンポ 捜索隊
セクシー & スパイシー
おためし版

著 者 さ ざ ん か
発 行 者 さ ざ ん か
発 行 日 — — —